報　告

第20回根研究集会に参加して

橋本　啓

名古屋大学大学院生命農学研究科

第20回根研究集会が2004年6月12日、中部大学リサーチセンターで開催されました。

中部大学はとても洗練されたつくりの大学で、リラックスして会に望むことが出来ました。会そのものもスムーズに進行し良かったと思います。セッティングをして下さった中部大学の方々、有難うございました。

私は今回はじめて根研究会に参加させていただきました。私が今回参加する前に抱いていた根の研究会のイメージは、「根とは何か」を追究する集団でした。つまり根が植物の中でどう機能しているか、とか生態系における根の役割はなにか、とかいった感じです。けれども、実際参加してみて、「根の研究」は2つに分類できるかな、と感じました。一つは上に書いたような根そのものの意義や仕組みの研究。もう一つは何か別に目的があってそれを解明もしくは解決する過程としての根を研究です。例えば作物の低酸素ストレスを解決するために根を調べる、とか気孔の制御の仕組みを知るために根の関与を調べるといった研究はそうなのではないでしょうか。

つまり、今書いた2つの分類には視点として「根」が目的の中心として存在するのか、手段の一部として存在するのかという違いがあると思います。この二つの異なる視点が同じ会場で議論されるということは大変有益だとおもいます。なぜなら、この二つの視点は互いの利点と欠点を補完しうると考えるからです。「根とは何か」を目的の中心に据えた研究は、ともすれば一体それが何の役に立つのかという視点を欠きがちになってしまうことがあるのではないでしょうか。その答えは実際に根の機能を何かに使おうとしている人の研究が出してくれるはずです。逆に何か現実的な問題を解決しようとしている根の研究は、それによって得た情報の何が学問的に新しく、何が人類の既存意識を変革しうるのかという視点が薄くなることがあるかもしれません。その答えはもう一つの視点が中心に据えていることでしょう。

ですので、やはり私の研究が「根」を目的としているのか手段としているのかよく認識した上でひとの研究を眺めると良い考えが浮かぶかもしれないなあと思いました。

まあ、そんなことは当たり前だよ、とかいいや全く間違った認識だなと思われる方も多いかと思いますが、私が今回参加して考ええたのはこんなところです。

「根」を研究会のテーマにする良いところの一つは、根というものがそれ自体を増やしたり改造したりすること自体に余り意味をもたず、今、私が考えたような手段だとか目的だとかをイメージしやすいところにあるのではないでしょうか。少なくとも私が「作物」や「土壌」を手段として使っているか、目的として使っているかということはいささか不可分すぎてよくわかりません。「根」ならまず手段として使っていると判断できます。

ともあれ、様々な学問領域でそれぞれことなる価値観をもつ研究者が、「根」という具体物にひきよせられてやってくる根研究会は、私のこり固まった頭を破壊するのによい機会だと思うので今後も積極的に参加させていただきたいと考えています。

2004年6月21日受付
＊連絡先　〒464-8601　名古屋市千種区不老町　名古屋大学大学院生命農学研究科
E-mail: i041018m@mbox.nagoya-u.ac.jp